

大学生における友人関係の類型と 精神的回復力の関連について

川 端 壮 康*

Relations between Friendship Styles and Resilience in Contemporary College Students.

Takeyasu Kawabata

本研究は、大学生の友人関係の類型と、レジリエンスの状態にある者の心理的特性である精神的回復力の関係を検討したものである。本研究では、友人関係、自己愛傾向、精神的回復力、一般性セルフ・エフィカシーという変数について、大学生238名に対して調査を実施した。友人関係のパターンを見出すためにクラスタ分析により回答者を分類したところ、「過敏型自己愛タイプ」、「誇大型自己愛タイプ」、「自己閉鎖タイプ」の3つの友人関係の持ち方の類型が見出され、以下のような結果が得られた。①「自己閉鎖」タイプは、他の2つのタイプに比較して精神的回復力全般が低かった、②精神的回復力の下位尺度について、「自己閉鎖」タイプにおいて「新奇性追求」と「肯定的な未来志向」が有意に低い一方、「感情調節」は類型間に有意な差がなかった。

(キーワード：友人関係のタイプ、大学生、精神的回復力)

Key Words : Friendship Styles, College Students, Resilience

問題と目的

1 現代の青年の友人関係について

青年期とは、個人が社会的に自立していく過程において、親から心理的に離れ、個を確立していく時期である。身体、精神、そして社会関係の上で大きな変化を経験するこの時期に、青年たちは多くの困難に直面し、それを乗り越えていくことが必要となる（例えば、山田・宮下、2007）。

この時期には、こうした過程を支える情緒的な拠り所としての友人関係が重要な位置を占めるようになるとされる（柴橋、2004）。青年期の対人関係の中心は、児童期までの親子関係から、友人関係へと移行していき（長沼・落合、1998）、青年は友人関係を築く中で自己といえるものを見出していくとされる（松下・吉田、2007）。

ところが、現代青年の友人関係上の特徴として、「希薄さ」（松下・吉田、2007）が指摘されている。従来、青年期の友人関係として、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的共鳴や同一視をもたらすような関係が特徴とされ、これによって青年は新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されるとされてきた（岡田、2007）。このことを考えると、友人関係

2012年9月5日受理
* 尚綱学院大学 講師

が「希薄」な現代の青年は、人格成長の上で重要な条件を失っていると考えられ、こうしたことが成長の上で、あるいは適応上での困難に影響を及ぼしていることが推測される。

実際に、岡田（2007）によれば、現代の青年には、従来の「内面的友人関係」を取る者に加えて、「現代的友人関係」を取るものがおり、この「現代的友人関係」を取るものは不適応的であることが示されている。さらに、この「現代的友人関係」にも「自己閉鎖的なタイプ」と「自他共に傷つくことを避けようとする自己愛的なタイプ」の二種類があり、前者においては自尊感情、病理的自己愛などの全般的な不適応が、後者においては病理的側面における自己愛の特徴が顕著に見られたという。

これら二つの類型は、「対人関係に敏感で、傷付くことを恐れることが強い」とされる（大平、1995；岡田、1995）、現代的な若者の中に、さらに異なるタイプが存在することを見出したという点で注目すべきと考えられる。

2 友人関係の持ち方とレジリエンスについて

メンタルヘルスの実践という観点からは、上述の二種類の現代的友人関係を取るタイプの青年が、適応上どのような弱点を抱えているのかを明らかにしていくことが必要である。そのような取り組みの一つとして、本論文では、友人関係の持ち方と精神的回復力（小塩他、2002）との関係について明らかにすることを試みる。

ここで、精神的回復力とは、レジリエンスの状態に結びつきやすい心理的特性とされる（小塩他、2002）。そして、レジリエンスとは、「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程、能力、および結果と定義される」（Masten et al., 19901）。この定義にも明らかなように、人間の幅広い心理的な適応過程を理解するうえで重要な意味を持つと考えられるレジリエンスという概念には、適応の過程、能力、結果という異なる部分が含まれており、どの部分に焦点を当てるかは研究者によって異なっていて、統一的な見解は見られていない（小塩、2002）。本論文では、個人の心理的特性に焦点を当てるという目的から、レジリエンスの状態を導く心理的特性としての精神的回復力をレジリエンスとして扱うこととする。

今回、現代的友人関係との関連で、この精神的回復力を取り上げるのは、大学生などの青年は、その日常の中で多くの困難や苦痛をもたらすような出来事を経験する可能性があるところ（高比良、1998）、青年がそれらを乗り越え、適応していく過程、つまり、レジリエンスの状態に至るために求められる心理的特性が精神的回復力であるとされるからである（小塩他、2002）。現代的友人関係を取る青年の二つのタイプの、この困難を乗り越えていくために必要な心理的特性の面での特徴の違いを探ることが、彼らが、困難に直面した際の反応の違いを明らかにし、ひいては彼らが不適応に陥った際に有効な支援・援助を実施していくためには必要である。

小塩他（2002）の精神的回復力尺度は、新たな出来事に興味や関心を持ち、さまざまなことにチャレンジしていこうとする「新奇性追求」、自分の感情をうまく制御することができる「感情調整」、明るくポジティブな未来を予想し、その将来に向けて努力しようとする「肯定的な未来志向」の3つの下位尺度から成る。こうした精神的回復力について、岡田（2007）の友人関係の三つのタイプについて、それぞれの特徴を踏まえて考えてみると、「内面的な友人関係を取るタイプ」の青年は、岡田（2007）において、病理的自己愛や境界性人格障害傾向が低く、自尊感情得点が高いなど全体に適応的であったことから、精神的回復力においても全般に高い

と考えられる。また、「現代的友人関係」のうち、友人関係から回避し、自己にこもる傾向が強い「自己閉鎖的なタイプ」は、上述の適応指標において全般的な不適応傾向を示していることから、精神的回復力において全般的な低さを示すと考えられる。「自他ともに傷つくことを避けようとする自己愛的なタイプ」は、病理的側面における自己愛の特徴を示しており、「自他を傷つけないように警戒することで、他者から肯定的評価を受けるような関係を維持し、かろうじて自尊感情の低下を防いでいると考えられる」（岡田、2007、P.143）とされ、自己愛人格目録の下位尺度のうち「注目・賞賛欲求」のみが高いことが指摘されている。「注目・賞賛欲求」が優位な者ほど評価不安を感じる傾向があることを踏まえれば（小塩、2004）、周囲からの肯定的評価を得にくくなると考えられる困難に直面した状況での適応力を測定する精神的回復力尺度においては、このタイプは不安が強まり、精神的回復力は低い値を示すと考えられる。

本研究は、岡田（2007）の友人関係の3つのタイプと、精神的回復力との関係について、以下の仮説を検証することを目的とする。

- ①「内面的な友人関係を取るタイプ」の青年は、精神的回復力が高い。
- ②「自己閉鎖的なタイプ」の青年は、精神的回復力が低い。
- ③「自他ともに傷つくことを避けようとする自己愛的なタイプ」の青年は、精神的回復力が低い。

方 法

1 調査協力者

東北地方の4年制大学2大学の学部生238名（うち男子74名、女子164名、18歳から22歳、平均年齢19.2歳、標準偏差1.01）。

2 調査時期

2009年9月から同年12月

3 調査内容

調査内容は、以下の提示順序で、1冊の冊子として配布した。

(1) 現代的友人関係（友人関係尺度）

岡田（2007）による、現代青年の友人関係の特徴を測定する尺度である。本尺度は、内面的友人関係を避け、互いの内面に踏み込まないようなかかわり方を示す「自己閉鎖」、友人から自分が否定的に評価されないよう気を遣うかかわりを示す「傷つけられることの回避」、友人を不快にさせないよう気を遣うかかわりを示す「傷つけることの回避」、楽しく円滑な関係を取る「快活的関係」の下位尺度の、計35項目から成る。「全くあてはまらない（1点）」から「とても当てはまる（6点）」の6件法により実施した。

(2) 自己愛人格目録短縮版（Narcissistic Personality Inventory - Short version : NPI-S）

自己愛傾向を測定する尺度として、Raskin & Hall（1979）が作成し、小塩（1998）が邦訳

の上、信頼性・因子的妥当性を確認したNPIをもとに、小塩（1999）が作成した、より平易な項目内容で、かつ少ない項目数からなる尺度である。本尺度は、強い自己肯定を表す「優越感・有能感」、他者の注目の的になったり権力志向などの内容からなる「注目・賞賛欲求」、意見や決断力を表す「自己主張性」の下位尺度の、計 30 項目から成る。「全くあてはまらない（1点）」から「とてもよく当てはまる（5点）」の 5 件法により実施した。

(3) 一般性セルフ・エフィカシー尺度（GSES）

坂野と東條（1986）による、個人が一般的にセルフ・エフィカシーをどの程度高く、あるいは低く認知する傾向にあるかという、一般的なセルフ・エフィカシーの強さを測定する尺度である。16 項目から成り、「はい（1点）」または「いいえ（0点）」の 2 件法で実施した。

(4) 精神的回復力尺度

小塩他（2002）による、困難状況において苦痛を感じながらも、その後の適応的な回復を導く心理的な特性及び能力である精神的回復力を測定する尺度である。本尺度は、新たな出来事に興味や関心をもち、さまざまなことにチャレンジしていこうとする「新奇性追求」、自分の感情をうまく制御することができる「感情調整」、明るくポジティブな未来を予想し、その将来に向けて努力しようとする「肯定的な未来志向」の下位尺度の、21 項目から成る。「いいえ（1点）」から「はい（5点）」の 5 件法で実施した。

結 果

1 各尺度の分析

(1) 友人関係尺度の分析

全 35 項目の項目分析を行った結果、天井効果も床効果も見られなかった。そこで、友人関係尺度が、岡田（2007）と同様の 4 因子構造となるのかを検討するため、逆転項目について処理をしたうえで、全 35 項目に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、固有値の落ち込みから 4 因子で解釈が可能であった。次に、因子負荷量が 0.40 以上であることを基準とし、十分な負荷量を示さなかった 6 項目を分析からはずし、残りの 29 項目に対して再度因子分析を行った（Table 1）。回転前の因子寄与率は、第一因子 17.59%、第二因子 16.56%、第三因子 9.36%、第四因子 6.92%であった。これら四因子の累積寄与率は 50.43%であった。

第一因子は 8 項目で構成されており、岡田（2007）において、「自己閉鎖」と名付けられた因子に負荷量が高かった項目から成っていた。そこで、本研究においても、「自己閉鎖」因子と名付けた。

第二因子は 8 項目から構成されており、1 項目だけ、岡田（2007）において、「傷つけることの回避」因子に負荷量が高かった項目が含まれているのを除いて、他は「傷つけられることの回避」因子に負荷量が高かった項目から成っていた。そこで、本研究においても、「傷つけられることの回避」因子と名付けた。

第三因子は 10 項目から構成されており、3 項目が、岡田（2007）において、「傷つけることの回避」因子に負荷が高かった項目であり、7 項目が「自己閉鎖」因子に負荷が高かった項目

であった。この因子に含まれている「自己閉鎖」の項目をみると、「相手の内面に土足で踏み込まない」、「相手の言うことに口を挟まない」など、相手を傷つけないために、相手との距離を取るといった内容から成っていたことから、「傷つけないために距離を取る」因子と名付けた。

第4因子は3項目から構成されており、岡田（2007）において、「快活的関係」因子に負荷が高かった項目から成っていた。そこで、本研究においても、「快活的関係」因子と名付けた。

Table 1 友人関係尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目内容	I	II	III	IV
34. 楽しい雰囲気になるようふるまう	.717	-.179	-.140	-.020
15. 自分の心を打ち明けて話す	.698	-.122	.019	-.083
35. ウケるようなことをする	.690	-.061	.033	-.043
7. 浅い付き合いにとどめる	.668	.156	.087	.035
13. 相手の言うことに口をはさまない	.660	-.041	.040	-.013
27. 相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける	.572	.245	.154	.105
9. 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せないようにする	.567	.329	.108	.022
29. 友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける	.515	.375	.156	.145
8. 悩み事を相談する	-.072	.801	-.256	-.154
33. 冗談を言って相手を笑わせる	.097	.714	-.110	-.101
12. 相手に甘えすぎない	.183	.701	-.129	-.131
14. あたりさわりのない会話ですませる	-.108	.595	-.119	.323
24. 友だちをがっかりさせないよう気をつける	-.206	.560	.178	-.038
3. 本当の気持ちは話さない	.094	.489	-.042	.045
30. 相手の気持ちに気をつかう	.018	.479	.203	-.022
17. 友だちからバカにされないように気をつける	-.348	.417	.135	.017
21. 友だちから傷つけられないようにふるまう	.064	.012	.689	-.030
4. まじめな話題になると冗談でごまかす	-.022	-.094	.661	-.069
25. 友だちから「つまらない人」と思われないように気をつける	-.078	.038	.618	-.067
22. 友だちと同じ物を持つ	.149	-.205	.597	.006
32. 相手にやさしくするよう心がける	.012	-.156	.547	.002
31. お互いの約束をやぶらない	.150	.025	.527	.019
28. 友だちに心配をかけないように気をつける	.117	.007	.502	.009
18. 友だちと意見が対立しないよう気をつける	-.225	-.046	.483	.050
23. 仲間の前で恥をかかないように気をつける	.117	-.063	.451	-.061
19. 相手の世界に口出ししない	-.352	.093	.447	.034
5. 友だちにグチを言わないようにする	.044	-.114	-.112	.904
2. 友だちの内面に土足で踏み込まないようにする	.038	-.178	-.019	.835
10. 必要に応じて友だちを頼りにする	-.124	.099	.048	.642
因子相関行列	I	II	III	IV
I	—	-.088	-.019	-.345
II	-.088	—	.421	.192
III	-.019	.421	—	.097
IV	-.345	.192	.097	—

それぞれの因子に負荷の高い項目の得点を合計し、それぞれ「自己閉鎖」得点（平均 26.64、*SD* 7.21、 $\alpha = 0.84$ ）、「傷つけられることの回避」得点（平均 31.66、*SD* 6.31、 $\alpha = 0.81$ ）、「傷つけないために距離を取る」得点（平均 41.30、*SD* 6.82、 $\alpha = 0.796$ ）、「快活の関係」得点（平均 13.22、*SD* 3.08、 $\alpha = 0.82$ ）を算出した。

(2) 自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) の分析

全 30 項目に対して項目分析を行った結果、第 4 項目、第 7 項目、第 17 項目に床効果が見られたため、分析から除外した。残りの 27 項目に対して、小塩 (1999) と同様の 3 因子構造となるのかを検討するため、因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行ったところ、固有値の落ち込みから 3 因子で解釈が可能であった。次に、因子負荷量が 0.40 以上であることを基準とし、十分な負荷量を示さないか、2 つ以上の因子に負荷が高かった 6 項目を分析からはず

Table 2 自己愛人格目録短縮版の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III
2 私は、才能に恵まれた人間であると思う	.887	.090	-.158
8 私は、どちらかと言えば注目される人間になりたい	.861	.124	-.191
23 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	.817	-.042	.029
26 私は、人々の話題になるような人間になりたい	.776	-.023	.007
5 私は、みんなからほめられたいと思っている	.695	-.171	.066
14 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	.627	-.202	.209
20 機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい	.609	.097	.111
29 人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる	.449	.017	.099
3 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	-.080	.781	-.089
24 私は、自己主張が強い方だと思う	.037	.742	-.129
9 私は、どんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振舞っている	-.100	.691	-.067
30 私は、個性の強い人間だと思う	.078	.660	-.142
27 私は、自分独自のやり方を通す方だ	.003	.524	.006
25 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	-.014	.489	.223
6 私は、控え目な人間とは正反対の人間だと思う	.073	.483	.065
18 これまで私は自分の思い通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う	-.160	.416	.155
10 私は、周りの人が学ぶだけの値打のある長所を持っている	.111	.407	.318
19 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	-.037	-.203	.773
22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	-.005	-.019	.696
13 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	-.066	.136	.567
28 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う	.174	-.087	.538
16 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.081	.326	.431
21 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	.139	.254	.424
因子相関行列	I	II	III
I	—	.547	.530
II	.547	—	.506
III	.530	.506	—

し、残りの23項目に対して再度因子分析を行った (Table 2)。その結果、ほぼ小塩 (1999) と同様の因子構造を確認できた。回転前の因子寄与率は、第一因子 34.56%、第二因子 10.05%、第三因子 7.87%であった。これら三因子の累積寄与率は 52.27%であった。

全項目を合計した「自己愛全体」得点 ($\alpha = .91$) に加えて、それぞれの因子に負荷の高い項目の得点を合計し、「注目・賞賛欲求」得点 ($\alpha = .90$)、「自己主張性」得点 ($\alpha = .83$)、「優越感・有能感」得点 ($\alpha = .80$) を算出した。

(3) 一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)

全16項目のうち、逆転項目の処理を行なったうえで、「はい (1点)」と答えた項目の数を合計したものを、GSES得点 (平均 8.22、SD 2.01) として算出した。

(4) 精神的回復力尺度

全21項目に対して項目分析を行なった結果、第4項目、第10項目、第13項目、第19項目に天井効果が見られたため、分析から除外した。残りの17項目に対して、小塩他 (2002) と同様の3因子構造となるのかを確認するため、因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行なったところ、固有値の落ち込みから3因子で解釈が可能であった。次に、因子負荷量が0.40以上であることを基準とし、十分な負荷量を示さないか、2つ以上の因子に負荷が高かった6項目を分析からはずし、残りの11項目に対して再度因子分析を行なった (Table 3)。その結果、小塩 (2002) と同様の因子構造を確認できた。回転前の因子寄与率は、第一因子 36.12%、第二因子 16.59%、第三因子 12.26%であった。これら三因子の累積寄与率は、64.97%であった。

全項目を合計した「精神的回復力全体」得点 ($\alpha = .80$) に加えて、それぞれの因子に負荷

Table 3 精神的回復力尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III	
9. 自分の将来に希望を持っている	.905	-.017	-.032	
3. 自分の未来にはきっといいことがあると思う	.814	-.100	.091	
6. 将来の見通しは明るいと思う	.797	.049	-.074	
12. 自分には将来の目標がある	.446	.180	.080	
18. 新しいことをやり始めるのは面倒だ	-.049	.855	.004	
16. 慣れないことをするのは好きではない	-.106	.678	.065	
1. いろいろなことにチャレンジするのが好きだ	.126	.663	-.009	
7. 物事に対する興味や関心が強い方だ	.213	.499	-.073	
2. 自分の感情をコントロールできる方だ	.046	-.036	.788	
21. 怒りを感じると抑えられなくなる	.029	-.050	.616	
5. 動揺しても、自分を落ち着かせることができる	-.047	.137	.566	
* 逆転項目は逆転済	因子相関行列	I	II	III
	I	—	.534	.110
	II	.534	—	.164
	III	.110	.164	—

の高い項目を合計し、「肯定的な未来志向」得点 ($\alpha = .83$)、「新奇性追求」得点 ($\alpha = .79$)、「感情調節」得点 ($\alpha = .69$) を算出した。

2 友人関係のパターンによる回答者の分類とその他の尺度の結果

友人関係尺度の項目得点を変量とし、変量間のコサインを類似性指標とした平均連結法によるクラスタ分析によって回答者を分類した結果、3クラスタが得られた。投入変数である友人関係尺度の標準化得点について、クラスタごとの平均値を Table 5 (Z欄) に示す。

クラスタ間での男女比について χ^2 検定を実施したところ、先行研究 (岡田, 2007) とは異なり、男女間に有意な差がみられた ($\chi^2(2)=15.84, p<.00$)。なお、クラスタごとの男女比は Table 4 に示したとおりであり、第 1 クラスタにおいて女性の比率が高く、第 2 クラスタにおいて男性の比率が高かった。ここで、Table 4 に示されたように、本研究においては、クラスタ分析の結果、男性においては十分な被験者数が確保されなかったクラスタが生じたことから、以後の分析では、女性についてのみ行うこととする。

各クラスタの友人関係尺度及び他の尺度の得点の平均値を求め、各クラスタ間での一元配置分散分析を実施した。その結果、NPI-S の「自己主張」下位尺度、GSES 以外は $p<.05$ でクラスタ間の有意な差が見られたため、Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行なった (Table 5)。

その結果、第 1 クラスタは、「自己閉鎖」得点が、第 3 クラスタと並んで低く、「快活的関係」得点が、第 3 クラスタと並んで高かった。また、「傷つけられることの回避」、「傷つけないために踏み込まない」の得点が、三クラスタ中最も高かった。ここから、本クラスタは、自他ともに傷つくことを回避しつつ、他者と円滑な関係を取る群と考えられる。

第 1 クラスタの自己愛人格目録は、第 3 クラスタと並んで「自己愛全体」が高いことに加えて、「注目・賞賛欲求」、「優越感・万能感」得点が高く、第 2 クラスタと並んで、「自己主張性」得点が低かった。

第 2 クラスタは、内面的友人関係を避ける傾向である「自己閉鎖」得点が最大で、「快活的関係」は最も低かった。ここから、この群は、友人関係から回避し、自分の世界にこもる傾向を有すると考えられる。

第 2 クラスタは、自己愛人格目録の「自己愛全体」が 3 クラスタ中最も低いことに加えて、

Table 4 クラスタ間の男女差

クラスタ	男 (人) (調整された残差)	女 (人) (調整された残差)	合計
1	12 (-3.5**)	64 (3.5**)	76
2	43 (3.6**)	55 (-3.6**)	98
3	19 (-0.3)	45 (0.3)	64
合計	74	164	238

** $P<.01$

Table 5 全回答者及び各クラスタでの平均・標準偏差及びクラスタ間での分散分析結果
(友人関係尺度下位尺度得点については各クラスタの平均標準得点をZ欄に示した)

		全体	第1 クラスタ	第2 クラスタ	第3 クラスタ	F値 (上段)
人数 (男, 女)		238 (74, 164)	76 (12, 64)	98 (43, 55)	64 (19, 45)	多重比較結果 (下段)
[友人関係]						
自己閉鎖	平均	26.639	22.776	32.755	21.859	$F(2,235) = 121.193^{**}$
	SD	7.214	4.846	4.939	5.555	$2 > 1, 3$
	Z		-0.536	0.848	-0.663	
傷つけられる ことの回避	平均	31.664	36.145	31.133	27.156	$F(2,235) = 50.894^{**}$
	SD	6.312	4.13	6.253	4.906	$1 > 2 > 3$
	Z		0.711	-0.084	-0.714	
傷つけないために 踏み込まない	平均	41.298	44.671	42.265	35.813	$F(2,235) = 41.555^{**}$
	SD	6.823	4.957	5.857	6.877	$1 > 2 > 3$
	Z		0.494	0.142	-0.805	
快活の関係	平均	13.219	14.171	12.214	13.625	$F(2,235) = 10.133^{**}$
	SD	3.079	2.532	3.582	2.333	$1, 3 > 2$
	Z		0.309	-0.327	0.132	
[自己愛人格目録] (女)						
自己愛全体	平均	60.476	62.250	54.273	65.533	$F(2,161) = 8.797^{**}$
	SD	14.698	15.921	12.348	13.092	$1, 3 > 2$
注目・賞賛欲求	平均	22.848	24.453	19.764	24.333	$F(2,161) = 8.443^{**}$
	SD	7.134	7.158	6.357	6.905	$1, 3 > 2$
優越感・有能感	平均	13.171	13.828	11.400	14.400	$F(2,161) = 12.410^{**}$
	SD	3.509	3.636	3.413	2.508	$1, 3 > 2$
自己主張性	平均	24.457	23.969	23.109	26.800	$F(2,161) = 4.036^*$
	SD	6.822	7.147	6.277	6.535	$3 > 1, 2$
[一般性セルフ・エフィカシー尺度] (女)						
	平均	7.94	8.00	7.71	8.13	$F(2,161) = 0.573$
	SD	2.051	2.323	1.921	1.791	
[精神的回復力尺度] (女)						
精神的回復力全体	平均	35.829	37.250	33.218	37.000	$F(2,161) = 5.303^{**}$
	SD	7.494	7.374	7.659	6.735	$1, 3 > 2$
新奇性追求	平均	12.713	13.141	11.691	13.356	$F(2,161) = 3.258^*$
	SD	3.720	3.724	3.646	3.619	$1, 3 > 2$
感情調節	平均	9.860	10.266	9.727	9.444	$F(2,161) = 1.425$
	SD	2.607	2.470	2.656	2.710	
肯定的な未来志向	平均	13.256	13.844	11.800	14.200	$F(2,161) = 5.836^{**}$
	SD	4.028	4.013	3.817	3.888	$1, 3 > 2$

「注目・賞賛欲求」、「優越感・万能感」得点も3クラス中最も低く、「自己主張」得点が第1クラスと並んで低かった。

第3クラスは、友人関係尺度の「自己閉鎖」得点が第1クラスと並んで低く、「傷つけられることの回避」、「傷つけないために踏み込まない」得点がクラス間で最も低く、一方「快活的関係」は第1クラスと並んで高かった。ここから、このクラスは、過剰に周囲に気を遣うことなく、友人と踏み込んだ関係を持つ群と考えられる。

第3クラスの自己愛人格目録は、「自己愛全体」が第1クラスと並んで高いことに加えて、「注目・賞賛欲求」、「優越感・万能感」得点も第1クラスと並んで高く、「自己主張性」得点はクラス間で最も高かった。

3 各クラスにおける精神的回復力尺度の結果

クラスを独立変数、精神的回復力尺度得点を従属変数とした1要因分散分析を実施したところ、有意な差が見られたため、TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行なった。その結果、「精神的回復力全体」では、第1クラスと第3クラスが第2クラスより高かった。さらに、下位尺度では、「新奇性追求」、「肯定的な未来志向」得点が、第1クラスと第3クラスにおいて、第2クラスよりも有意に高かった（Table 5）。

考 察

1 友人関係のパターンによる回答者の分類について

本研究の結果を、岡田（2007）の先行研究と比較すると、いくらか異なった結果が得られた。まず、友人関係尺度の下位尺度の一つ（「傷つけないために踏み込まない」尺度と、「傷つけることの回避」尺度）において、その内容にいくらか違いが見られた。また、クラス分析による友人関係の持ち方の類型において、「自己閉鎖」タイプ（第2クラス）は同じだが、残りの2つのクラスには違いが見られた。

すなわち、第1クラスは、友人関係尺度の「自己閉鎖」が低く、「傷つけられることの回避」、「傷つけないために踏み込まない」、「快活的関係」が高く、自己愛人格目録の「注目・賞賛欲求」、「優越感・万能感」も高かった。一方、第3クラスは、「自己閉鎖」が低く、「快活的関係」が高く、すべての自己愛目録の下位尺度が高かった。このことは、第1クラスと第3クラスは共に自己愛傾向が強いが、第1クラスは自他ともに傷つくことを回避しようとする傾向が強いのに対して、第3クラスはそうした傾向があまりないことを示している。これは、Gabbard（1994）による自己愛性人格障害を「過敏型」と「誇大型」の二つのタイプを両極とする連続体ととらえる立場からは、第1クラスは「過敏型」に、第3クラスは「誇大型」に類似した特徴を持つことを示している。ただし、第1クラスは「優越感・万能感」も高い点が、一般的にいわれる「過敏型」の特徴とは異なっており、ここから、純粋な「過敏型」よりも、いくらか「誇大型」寄りの特徴を持つと考えられる。

岡田（2007）とは異なり、類型間に男女差がみられたこと及び、「内面的友人関係」タイプと「自他ともに傷つくことを避ける自己愛的」タイプとは異なる類型が抽出されたことについて、本研究においては、男性のデータの不足のため、クラス間の比較については、女性のデータのみを分析していることが影響している可能性がある。岡田（2007）においては男女差が認め

られなかったものの、友人関係の持ち方に関して性差が存在するという指摘や（竹内 2010；石本他、2009；柴崎、2004）、自己愛人格の発達過程に性差があるという指摘（河上、2007）、男女において自己愛の因子構造が異なっているという指摘（大石・福田・篠置、1987）もあり、そうした性差が今回の結果に影響を与えている可能性があり、この点について、今後さらなる研究が必要と考えられる。

2 友人関係のパターンと精神的回復力について

友人関係のパターンと精神的回復力との関係についての仮説は部分的に支持された。すなわち、「自己閉鎖」タイプである第二クラスタの精神的回復力が低い点は仮説の通りであった。一方、クラスタ間で「感情調節」に有意な差が見られなかった点は仮説とは異なっていた。また、「自己閉鎖」タイプ以外の二つのクラスタが仮説とはことなる類型となったため、「内面的友人関係」タイプと「自己愛的」タイプの違いについては検討できなかった。

友人関係から回避し、自己にこもる傾向を持つ「自己閉鎖的なタイプ」は、困難に直面すると不適応に陥りやすいことが示された。内面的関係を避けることで安定を得ようとすることは、発達的にも適応的にもせい弱性をもたらす危険性があることが示唆されており（岡田、2007）、青年期における周囲との適切な交流の重要性が示された。

また、Gabbard (1994) の「過敏型」に類似した特徴を持つ第1クラスタと、「誇大型」と類似した特徴を持つ第3クラスタとの間に、精神的回復力について統計的に有意な差がなかったのは、両クラスタ間に「自己愛全体」得点に差がなかったこと、そして自己愛傾向全般は自尊心と正の相関関係にあり（小塩、1997、1998）、精神的回復力は自尊心と正の相関関係にあること（小塩、2002）から理解される。

さらに、本研究では、「精神的回復力全体」では差があるにもかかわらず、その下位尺度である感情を適切に制御することについて、クラスタ間で有意な差がないことが示されたが、このことは、小塩（2002）が示唆するように、精神的回復力の「3つの要因が、異なった側面で回復を支えている」（p.64）こと、すなわち精神的回復力の3つの下位尺度が別個に影響し得ることを示すと考えられる。

3 今後の展望

本研究においては、クラスタ分析の結果、男性の被験者数が十分でなくなったため、男性については分析を実施しなかった。十分な被験者数を確保した上で、男女差について、さらなる検討が必要である。

また、本研究においては、いわゆる「内面的友人関係」を取る類型が抽出できなかったため、従来の青年期に特徴的とされた友人関係の持ち方をする者と、「現代的友人関係」を取る者との比較ができなかった。男性の被験者数を増やしたうえで改めて、友人関係の持ち方のパターンと精神的回復力の関係について明らかにしていく必要がある。さらに、今回は、友人関係の持ち方と精神的回復力がどのような過程を経て影響し合っているのかについては検討していないが、こうした内的な構造を明らかにしていくことも重要である。

＜参考文献＞

- Gabbard, G.O. 1994 Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM- IV Edition. Washington: American Psychiatric Press
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 2009 青年期女子の友人関係スタイルと友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連. 発達心理学研究, 第20巻, 第2号, 125-133
- 河上純子 2007 青年期の自己愛傾向の高まりに影響する要因の検討. お茶の水大学人間科学文化創成科学論叢, 10, 261-272
- Masten, A. S., Garmezy, N., Tellegen, A., Pellegrini, D. S., Larkin, K. & Larsen, A. 1988 Competence and stress in school children: The moderating effects of individual and family qualities. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 29, 745-764
- 松下姫歌, 吉田美悠紀 2007 現代青年の友人関係の“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 教育人間科学関連領域 No. 56, 161-169
- 長沼恭子・落合良行 1998 青年期における友達との付き合い方の発達の变化. 青年心理学研究, 10, 35-47
- 大石史博・福田美由紀・篠置明男 1987 自己愛的人格の基礎的研究(1) - 自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について -. 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 535
- 大平健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, 43, 354-363
- 岡田努 2007 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究第15巻第2号, 135-148
- 面高有作, 柴山謙二 2008 今日の大学生の対人関係の改善に及ぼすロールプレイングの効果 熊本大学教育学部紀要. 人文科学第57号 129-144
- 小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究: 自尊感情, 社会的望ましさととの関連. 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 44, 155-163
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46, 280-290
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 - 精神的回復力尺度の作成 -. カウンセリング研究 Vol. 35, No.1
- 小塩真司 2004 自己愛傾向と大学生生活不安の関連. 中央大学人文学部研究論集 第12号, 67-78
- Raskin, R. & Hall, C. S., 1979 A Narcissistic Personality Inventory. Psychological Report, 45, 590
- 坂野雄二・東條光彦 1988 獲得された無力感の解消に及ぼす Self - Efficacy の効果. 行動療法研究 13, 143-153
- 柴橋祐子 2004 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因. 教育心理学研究 52, 12-23
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生用)の作成と妥当性の検討. 社会心理学研究, 14, 12-24
- 竹内由美 2010 大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係. 比叡山大学心理相談センター年報 第6号, 15-22
- 山田裕子・宮下一博 2007 青年の自立と適応に関する研究: これまでの流れと今後の展望. 千葉大学教育学部研究紀要 第55巻, 7-12